

志満先生のご逝去を悼む五首

先生の亡くなりしこと今し知る何をすべきぞけふよりわれは  
これほどに時代は段差ありて過ぐ昨にいましし人すでに亡し  
歌詠みのわが一時期は終りたり明日より何がわれを導く  
蛇崩のみちをあゆみて先生の許へ通ひし日々が茫々  
歌詠みがいのち論じし過去ありぬ自省が人を育みし日々  
なすこともなく考ふる事もなし先生のぬぬ今となりせば  
おほかたは事業軌道に乗りしゆゑ先生に逢ふこともおもひぬし  
写生歌はいま終りしかさにあらずわれら継がんといふも悲し  
生きざまにわが魅かれつつある時は薔薇ひかり咲くことも学び  
悲しきと口にいだせば自らが偽善者のごともおもへて虚し

反骨の導くままに荒々しき生を過ごしきつ歌作りつつ  
つぢつまを何に合はせん太かりし支柱の一つ崩れし今は  
生々しき日々生きつつ風雅などつゆ閑はらぬ道歩み来つ  
黒船のごとおそひ来し不況下に廓然無聖の先生は逝く  
竹割るる如き言葉に上京せしわれの仕事を氣遣ひくれし  
鹿兒島に生れ東京に生終へし先生のことわれは忘れず  
身辺にものの移るふ寂しさはそこはかとなし先生逝きて  
日々に読む正法眼藏隨聞記けふの現実をありありと説く  
われに親しく接しくれたる先生の声きくさへやもはや叶はず  
荒くれて生きこし吾は先生につひに逢へざりしこと悔むのみ

ずぬきをば味噌汁にして食ふ夕餉おもひみざりし訃報を目にす  
移ろひは常身ほとりにみち満ちて生は哀し生は哀し  
眞実を追ひ求めつつ歌に詠む嘗みあはれ非力のわれに  
避けられぬ日を迎へしか蛇崩に先生を訪ふこともはやなし  
佐太郎先生志満先生に師事したることありがたく頭の垂るる  
唐突に移る時代の中に居てわが行末をしばらくおもふ  
先生と直に語らひし思出をわが内に秘め生きんとぞする  
とめどなく移ろふ時に身を委ね写生短歌に一生賭けんか  
揺れ動くところを今し引き緊めて写生短歌にわが対ふべし  
なし得べきことは少しと思へれど志満先生のところを継がん

揺らぎある心しづめんとひたすらに出でくる歌を書き留めけり

なりはひに埋没したる吾ゆゑに歌の集ひに疎くゐたりき  
賜りし恩を忘れず先生の詠みし現をわれも詠み継がん  
祐天寺駅に降り立ち先生のいまし居へとかつて通ひし  
移るひはとめどもあらずなりはひに励む私をお許したまへ  
わが祖母に重ねみをりし先生はともて虚飾なき命を生きし  
先生の作品をわがづけづけと批評しをるを笑みて聞かしし  
さしあたりわれはこのまま生きゆかん而してただに老いてゆくべし  
身辺に歴史は一つ過ぎにけりかくてわが生も晩年に入る  
わが生を人体実験とみなすゆゑ写生短歌をその証とす

かくあまた儂き歌を詠み並べ揺らぐ心を鎮めつつゐき  
先生にまみゆることのもはや無くわれの *sollen* はいづくへ向かふ  
ひたぶるに生きて来りぬ短歌にてわれの一生は育まれつつ  
恩返しをせねばと思ひをりしかどつひぞ叶はず逝きたまひけり  
宗教の如く敬ひ来しからにこれより何を恃みて生くる  
また一人又も一人と人逝きて寂しくなりぬわが身辺も  
とめどなく歌出でくるは先生を悼む心のゆゑと見たまへ  
旧きをば踏まへてわれは今日よりは新しき道歩みゆくべし  
黄月忌に迎へられたる如くにてその日に近く発たれましか  
遠どほに吹く風の音が聴かん先生が風になりし日なれば